
魔法少女リリカルなのはStrikerS ~転生したら魔法？がある世界だった~

D-5

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikerS～転生したら魔法？
がある世界だった～

【Zコード】

N9643W

【作者名】

D-5

【あらすじ】

空から落ちてきた豆腐の角に頭をぶつけ死亡した男。しかも記憶喪失というオマケ付き。

彼は神のミスによって死亡したのでお詫びに転生することになった。でも転生した世界には魔法というものが存在していた。

「よし、魔法つてのがどんなものかは理解した。でもな、砲撃や殴る斬るは魔法なのか？」

これはそんな彼が新たな世界で生きていく物語である。

プロローグ（前書き）

初めましての人は初めまして、そして知っているという人はこんなにちわ。どうもD・5です。

今、書いている作品があるのに何をトチ狂つたのか新しい小説を始めることにしました。

初の転生物なので少々不安ですが、がんばっていきますのよろしくお願いします。
ではじめ。

プロローグ

「サー センしたあ――――――」

「は?」

ふと、田が覚めると真っ白な空間で茶髪のキャラ男が土下座していた。見事な土下座だな、どれ、そこにはあつた石の板を乗せてみよう。

「何が?」

「つて、ナチュラルな反応しながら石を乗せないでください!」

「いや、見事すげえのにすぐそばに拷問器具があつたら誰でも使いたくなるだろ?」

「なりませんよ!」

む、そつか・・・残念だ。

「で、お前は何を謝つているんだ?」

「す、すみません!わ、私の失敗であなたを死なせてしまいました!――」

随分と礼儀正しいキャラ男だなつて・・・え?

「死んだ?俺が?」

「は、はい・・・・・」

「はあ

[...]

真っ白な空間に俺の声が木霊した。

「落ち着けましたか？」

「ああ」

実際は混乱しているがな。

「何故俺は死んだんだ？」

説明をせでいたたるおもす事の始まり……」

昭和十九年十一月三日午後二時

卷之二十一

・パソコンで人間の情報を確認していく

・その時ぐしゃみをしてしまった貴方の元々を消失して

しゅう
た

・貴方は死亡した

「どういたします」

「うふ、ツツ「ハリ所はいろいろあるがまずせ言わせ。バックアッ
プくらい取れよ…」

「え、ツツ「ハムといふはナーフー?普通は書類じゃないのかよ、と
かじやいんですか!」

「紙媒体は時代遅れだ!」

「うわー

まつたく仕事してんだつたらバックアップくらい取れよ。

「で、俺の死因は何なんだ。事故死か、それとも他殺か?」

「え、えっと…………」

何を口籠っているんだ、「イツは。

「セツセツと言へ

「は、はい死因は…………豆腐の角で頭を打つて頭部が破裂し
たことです」

「…………はい?」

「豆腐だと?

「実は、貴方が立っていた場所の遥か上空でスカイダイビングをして
いる人たちが『飛びながら豆腐は食えるのか!』という実験をし

てまして……上空からの落下して付いた速度が破壊力に変わり、その下にいた貴方の頭を……

「木つ端微塵かよ……」

「はい……」

まさか、豆腐の角で死ぬなんて漫画でもあつえねえぞ。てか……

「スカイダイビングしながら豆腐食いつんじゃねえ——！」

はあ……それよりもだ。

「お前誰？」

「今更！？」

「そして俺は誰だ？」

「そしてかなりヤバいことになっていた！？」

「なるほど、神か……。信じられんな

すよ」「えりですみね~、同窓会で久々に会った友人たちによく言われますよ

まあ、どうからどう見てもチャラ男だしな。口サロやめたらいいんじゃね？

「あ、これ地です」

「そつか……」

色黒なんだな。

「で、俺はどうなるんだ。このまま二途の川行きか？」

「いえ、ミスで貴方を死なせたとはいえ寿命がかなり残っていたので、このまま転生してもらいます」

「転生？ てか後寿命どん位残つてたんだ俺？」

「確か、後…………百一十年くらいですね」

「ながつー？」

「ええ、人間の長寿記録を軽く塗り替えてますね。しかも死亡直前までバク宙ができるくらい元気な老人になる予定でした」

「スゲエな俺！」

死んだのが何歳なのかは忘れたが、普通はボケてベットの上だぞ。
妖怪か俺は。

「まあ、それはどうでもいい。で、転生つてどうこうことだそのま

ま生き返れるのか？」

「いえ、天界のデータバンクから貴方の情報は一切無くなってしまいましてので元の世界へ生き返らせるのは無理です。できたとしても……」

「ああ……」

頭が木つ端微塵だもんな……生き返った直後にまたお陀
仏だよ。

「といひ」と別世界に転生してもらいます」

「別？」

「はい、あなた方の世界で『アーネ』の世界つてやつです。しかも
バトルもの」

「ほつ……」

つまり戦闘がある世界なのか。

「オマケに能力も付けましょう。残っていた寿命分の力を」

それってかなり凄いんじゃないか、百一十年分だし。

「どんのがいいですか？超人的な力やどんな問題でもどんなどと
でもできる天才的な知能と才能何でもありますよ」

「いや、どんのがいいと言われても記憶が無いしな……」

生前の俺はオタクなのがもわからんじ。

「ああ、そ、そうでしたね…………では、『ランドムに決めま
しょうか。はつー！」

チャラ男が手を前にかざすと煙と共に何か出てきた、あれは…
・ルーレット？

「もうですダーツは一本、寿命十年となります。貴方の寿命分だと
十一本ですね」

「お、おう」

十一本のダーツを渡される。ダーツなんかやったこと無いぞ…
・多分。

「では、じゅるー！」

とつあえず投げてみるか…………一本同時。

「よつと」

ストップ！

「い、一気に投げますか…………えーと、おおーこうのに当た
りましたね」

「やうなのか？」

「ええ！」

ふむ・・・まあそういうならいいものなのだろう。

「それでは後十本ですよ！」

「・・・・いらぬ」

「え？」

「いらぬえよ。有利になる力がありすぎると人生がつまんなくなる

困難があつてこそ人生だ。

「で、でも、残りは・・・・・」

「ああ・・・・・一本は金運に使ってくれ。残りはそうだな・・・・・
・・」

どうするか・・・・・・。

「俺の家族はどうなつてるんだ？」

「か、家族ですか？妹さんが一人だけです、ご両親は・・・・既に
他界してますね。随分と大変だったみたいですね。兄妹二人だけで
必死に生きていたみたいですね」

「そうか・・・・・・」

妹がいたのか・・・・・だつたらこう使うか。

「なら残りのダーツは全部妹に使つてくれ」

「へ？ い、妹さんにですか？」

「そりだ、妹にだ。足りないか？」

「い、いえ、全然！」

「だつたら良かつたぜ。」

「じゃあ、それで頼むぞ」

「え、あの？ 本当によろしこのですか？」

「構わなねえよ」

「・・・・・・・わかりました、残りのダーツは妹さんの幸福にまわします」

「それでいい」

「これで思い残りはねえ。」

「それでは転生してもうこます」

「おひ、頼む」

「はつー。」

ガショソッ

「ん？」

何故俺は固定されているんだ？そして何だ、あの大きな大砲はどう見ても戦艦の主砲じゃないか。

「それでは、いい来世を！」

「ちょっと待て…まさかこのまま」

「てえ――――――――――」

「やつぱりなるのかよチクショ――――ツ――」

チユドーーン！

俺の目の前は真っ暗になった。

「まったく面白い人ですね……前に来た男に比べたら雲泥の差ですよ」

残ったダーツを中心に浮かべ見つめる。

「これ一本があれば世界を救うほどの奇跡の力があるといふの？」「…………」

ダーツを粒子に変え消す。これで彼の妹さんは世界でもっとも幸せになれるだろ。

「ですがこれでは私のポリシーに反しますね」

私のポリシーは生まれ変わる人間に最高の幸せを送ることだ。だが彼はそれ断つたのだ。

「彼の意思には反しますが、これは私からのプレゼントですよ」
懐から一本のダーツを取り出す。それをルーレットに投げる。
サクッ！

「ふむ・・・まあまあですかね」

あの世界だったり役に立つ力だろ。

「わい、幸せになつてくださいね

さん

「ねややあ――――――！」

「おひおひ、起きやがったの？」

え? ちょ、ここはどうだ? そして体が動かせねえ!

「おしめではないし……お腹が空いたのから?なら……」

む、なんだ、口に出たるものさ。

「あれ？違うの・・・だつたら何かしら？」

もう・・・よく見えんな。どうなつているんだ俺の体は。

「今度は大人しくなつた・・・・・おしめでもないしおっぱいでもない・・・・・ふふ、よくわからない子ね、でも可愛いわ」

・・・・・ わたしから黽ひがむおこなはせよことこのい單語、
まさかだが・・・・・ 俺。

「私の愛しいヴィント」

赤ん坊になつてゐるのかあ――――――――――――――！？

「樂府」

「あ、あらあら? 今度は何かしら

こうして俺の新たな人生が始まつたのであつた。

プロローグ（後書き）

こんな感じです。今回はプロローグなので短いですが。次回からはできれば五千文字位で書けたらいいと思います。

更新は他に書いている作品もありますので交互になると思いますのでご了承を。

では、こんな未熟な作者ですが精一杯書いていきますのでよろしくお願いいたします。

欲しいことは書いた、だがやつ過ちだらう。され……（前書き）

書きあがつたので投稿します。

欲しいとは言つた、だがやり過ぎだらつ。これ・・・・

やあ、新しい人生を謳歌している豆腐の角で頭を打つて死に転生した男、ヴェント・カグラだ。今俺が思つたことを言おう、それは・・・。

やり過ぎだキャラ男――――――――――

この世界に生まれて早七年・・・え？その七年の間はどうしただつて？ハハハ・・・・言えるわけないだろ？俺にとって黒歴史なんだよあの時間はおしめを変える時や食事の時間のときは。これ以上は喋りたくないんだよわかるか？

まあいい、話を戻そう。あのチャラ男やり過ぎだ、確かに俺は金運が欲しいとは言つたがさすがにこれはやり過ぎだ。
俺が生まれたカグラ家は一般的な中流家庭だったのに、俺が生ま
れた途端・・・・・。

・宝くじが当たつた、金額は良く知らんが一等から五等まで総なめ、かなりの大金だつたらしい。

・その金を元に会社を始めたら大成功。

・今やその業界を代表する大企業となつた。

な、やり過ぎだろ。俺が言つたのは生活する分に困らない程度の金運が欲しいって言つたんだが・・・まあ、会社が成功したのは多分母さんの手腕のおかげなんだろうけどな。

「どうしたのウソト、ため息なんついて、何か悩み事？」

「ううん、なんでもないよ母さん」

「この世界の俺の母親、シルフィーヌ・カグラ（22歳……年はこのとおり言えないが一児の母とは思えないくらい）の美貌を持つ人だ。てか、どう見ても中学生にしか見えないんだよな……俺の親父はロリコンだな、うん。

ちなみに父親の顔は知らん。前に一度聞こうとしたら……。

「父親ね……いるんじゃないから。どうかに」

と言われた。その時の母さんの身体からは凄まじいほど怒気が溢れ出でていた。

後に母さんの友人から聞いた話だが、俺の父親は俗に「ヒモ」というやつらしく、世界中に女を作つていろんな所を転々としているらしい。……ヒモでロリコン、最悪だな。

「あ、ヴォント、そもそも学校に行かないと危ないわよ」

「うおー、もうそんな時間が。

俺は残つたトーストを口に詰め込み、カバンを持ち玄関へ向かう。

「じゃあ、いってきます」

「はー、いってらっしゃい」

母さんに手を振り外に出る。さて、行くか学校に。
さてここで俺が転生したこの世界で一番驚いたことを教えよう。
それは……。

魔法といつものが存在するのだ。

最初は信じられなかつたが、だが母さんに実物を見せられて信じざるつをえなかつた。

「ミッシュドナルダ」という世界は魔法文化によつて発展した世界だ。母さんの会社もこの魔法文化があるから成り立つてゐるらしい。魔法を使うためのツール、デバイスという物を作つてゐるらしい。原理はよくわからないが、そのおかげで生活できるんだ、ありがたい事だ。

そして俺が住んでいるのはミッシュドナルダ首都、クラナガンだ。

「クラナガンには時空管理局ミッシュドナルダ地上本部がある。え？ 時空管理局ってなんだだつて？ そういうえば説明してなかつたな。

時空管理局、いくつもある次元世界、つまり「ミッシュドナルダ」と同じような星からロストロギアという危険物の規制と質量兵器の根絶を目標とした組織だ。

簡単に言つと次元世界の警察みたいなもんだ。その本部がここにあるのだ。

「おひさま少年」

「む、おはよ」

学校までの道のりの途中、青い髪の女性と厳ついおひさま……
男性に話しかけられた。

「おはよ／＼」ぞこますクイントさん、ゼストさん

青い髪の女性の名前はクイント・ナカジマ、おっさんはゼスト・グラウツ。先ほど説明した管理局の局員だ。そして母さんの旧友らしい。

「相変わらず礼儀正しいね、あの子とは大違ひだわ」

「お前はもう少し落ち着きを持って。ヴェントを見習へ」

「ちよつー。それは酷いですよ隊長～」

相変わらず賑やかな人だなクイントさんは、そしていつも相変わらずダンディーだなゼストさん。

「あの学校がありますので行つていいですか？」

「む、ああ、引き止めてしまつてすまんな」

「いいえ、大丈夫です。それでは・・・」

「うむ、行つて來い」

「いつてらつしゃーい」

一人にお辞儀をしてその場を去る、これも朝の日課だ。この時間に来るといつもあの二人がいる、ビーチやらパトロールコースと重なつていてるみたいだ。

まあ、そんなことよりも学校に行かなければな。時間も危ないし

少し走るか。

足に入れて地面を蹴り前へ出る。さて、間に合えばいいのだがな。

「ふう・・・・間に合つたか」

走ること十分、閉門五分前だ。どうやら間に合つたみたいだな。走るのを止めて歩きに変える、朝から無駄な体力を使つたな。む、後ろから何か来るな。

「おっはよーーーー、ヴォン・・・ヒツヒーーーー！」

「・・・・・（ヒョイ）」

「つて、あらあ～～～？」

いきなり飛び蹴りをかましてきた馬鹿を避け、馬鹿は勢いよくそのまま地面を滑つていった。

「・・・・・・行くか

「待てよーーー！」

「何のようだカカオ、朝から傷になつて

「お前が避けるからだろうー！」

朝からひつねをこやつだ。『イツはカカオ・ココナッツだ。特徴は馬鹿、以上。

「もつちゅうじとマジな説明しろよー。」

「つむせえ、事実だろ」

「何を！天才の俺様に向かって馬鹿とは何だー。」

「 2×5 は？」

「？」

「馬鹿だ、『イツ』

「何故だ！？」

足し算と掛け算を間違える時点で馬鹿なのは確定だらう。

「お、俺様は戦闘の天才なのだー。」

「その天才のとび蹴りは簡単に避けられるのだが

相手するのも面倒だし放つておくが。

「・・・・・・・・・・(、・・・・)」

「ちよ、ちよっと待てよ、アントー。」

「うぬせこ、着いてくんな。

「ん？ あれは……？」

授業も終わって帰らうとしたとき見覚えのある顔が校門の前に立つていた。

「ん？ ビハしたヴュント、敵か」

「黙つてろ馬鹿」

「なんだと―――」

あいつが待つているつひ」とせ母さんか、メールくじこくれよな、
まったく。

「じゃあ、俺帰るわ」

「え？ ちよつ、ヴュントー？」

カバンを背負つて校門へ向かつ。馬鹿が何か言つてゐるがビハセ
大したこと無いだろうし、先を急いだ。

「どうしたクラウス」

「これはヴュント様、お帰りなさいませ」

俺に頭を下げる初老の男性、彼は母さんの会社の専属運転手のクラウスだ。母さんが俺を会社に呼び寄せるとき、いつも迎えに来るのだ。

「また母さんが？」

「はい、社長がお呼びです」

「わかった」

「では、どうぞ」

クラウスがリムジンの後部座席のドアを開け、俺は乗り込む。てか、いつもリムジンで来るなって言つてるのにな、邪魔になるだけなのに。

「では参ります」

エンジンに火が入りリムジンはゆっくりと動き出した。今日は何の用件なんだろな、実験でもないだろつし・・・・まあ行けばわかるだろう。

俺は窓から見える景色をただ眺めるのだった。

会社のビルに着いたらクラウスに礼を言つて、社長室に向かう。

「来たよ母さん」

「こりゃじ Vaughan、『めぐね急に呼び出したつて」

「いいよ。で、今日は何?」

「あ、今日はね」

「やつせーハント君。今朝ぶり」

「クイントセラピストさん?」

なんでこの二人がここにいるんだ?

「仕事ですか?」

「ああ、『バイスのこと』でな」

なるほどそういうことか。うちの会社は『バイスの開発・研究を行つてこる会社だ管理局にもうちのモートルが配備されているらしい。

「ん? だつたら向で俺は呼ばれたの母さん」

「ああ、ヴァントには悪いんだけどクイントの相手してくれない? ちょっと煩くて困るのよ」

はあ・・・またか。

「ちよ、ちょっとシルフィ私が相手するんじゃなくて、相手しても
うのー?普通逆でしょ」

「だつてクイントちゃん。それから全然落ち着き無かつたじやない、話聞いてなかつたし」

「うべー。」

「それにお前よつもヴォントのせつが落ち着いているといひがあるしな」

「た、隊長まで・・・・・」

ガックリと頭を落とすクイントちゃん。仕事なんだかうむつと眞面目にやれよ囁く。

「い、いいわよ相手になつてやうひじやない一行くわよヴォント君！」

「わかりました。母さんテストルーム借りるね」

「いいわよ。今なら一一番が空いてるから、母さんが連絡入れておくわね」

「あらがと」

クイントさんに引つ張られて、社長室から出る。すると頭の中には声が響いた。念話か・・・・。

念話つて言つのは一種のテレパシーみたいなものだ。魔法の初歩で素質のあるものだつたら誰でも使えるらしい。

『『ヴォント、わかつてこるだらうけど』』

『わかつてゐるよ、アレ（・・）は使わないよ』

アレ（・・）、俺が転生する際に得た、能力のことだ。母さんはそれを管理局には隠しておきたいらしい。何故かは知らんが母さんが言うのだからそつとしたほうがいいのだひ。

『さう、ならよかつたわ。怪我には気をつけね』

『それはクイントさんに言つて』

『フフ、さうね。じゃあがんばつて』

母さんはそう言つと念話を切つた。クイントさんに引っ張られて第一テストルームにたどり着く。ここはできたばかりのデバイスのテストをする場所でかなり頑丈な部屋で俺もよく使つている。

「さーて、どれだけ強くなつたか見てやるわ」

「お願ひします」

トレーニングウェアに着替えた俺は構えを取る。同じくウェアに着替えたクイントさんも構えを取つた。

何をするのかというと格闘の稽古だ。俺は護身術程度に武術を始めたのだが、時折クイントさんに稽古をしてもらつてゐるのだ。クイントさんはシユーティングアーツという格闘技法の使い手だ。実際まだ一度も勝つたことは無い。

「ああ、かかつてきなさい」

「……………いきますっ！…」

地面を蹴り俺は跳んだ。

「うふ、かなり良くなつたわね」

「ゼー・・・・・ゼー・・・・・」

くくそ・・・全然有効打が入んねえ・・・・・。体格差もあるけど、やつぱこの人強いわ・・・。

「死角から入つてくる攻撃もいいけど、もうちょっと絡め手を用意したほうがいいわね。あと攻撃がまだ直線的だったわよ」

「は、はい・・・・・」

まだ直線的だったか畜生、だいぶマシになつたつもりだったんだけどな。

「でも前見た時よりもかなり上達してたわよ。これからも頑張りなさい」

「はい」

はあ・・・訓練メニューの見直しだな。

「ヴェント君も強くなつたわね。十歳になつたらこれに出れば?..」

ん?何だこれ?

クインントさんが出した投影型のウインンドウには『一デイメンジヨン・スポーツ・アクティビティ・アンシエイション（DSA A）公式魔法戦競技会』と書かれていた。

「何ですかこれ?」

「あら?知らないのかしら、この大会はね昔私も出たことのあるんだけどかなり大きい大会でね。色んな管理世界から魔術師が集まつてお互いに己の技量を競い合つのよ。あ~懐かしいわね~メガーヌとシルフィとの青春の日々」

「へ~そりなんですか。まあ出るつもつも無いんですけど」

「え? そりなの」

「はい」

あまり目立たたくないしな、それに武術だって護身術にと思つてやつてるからな。

「わ~、残念ね。まあ出たくなつたらいつでも言つてね」

「はい」

出るつもつも無いが頷いておいつ。

「おい、クイントそろそろ戻るだ

話してくるとゼストさんがテストルームに入ってきた。

「あ、隊長。待ってくださいすぐに着替えますから」

急いで更衣室に向かうクイントさんを俺達は見送ぐるヒゼストさんが話しかけてきた。

「ヴォント君、クイントのこと頼んでもらったのでいい経験でした

「いいえ、稽古をつけてもらつたのでいい経験でした

「そうか」

厳つい顔して結構優しいんだよなこの人。クイントさんが言つてはかなり強い騎士みたいだけど、戦つたことが無いからわからないが。

「お、お待たせしました・・・」

本当に急いで着替えたみたいで髪もボサボサなクイントさんが部屋に入ってきた。制服の上なんかボタン掛け違えてるし。

「はあ・・・・・身だしなみくらじつかりしておけ

「え? あ、すみません・・・」

相変わらず慌しい人だな。

「では失礼したな」

「次ぎ会つときも楽しみにしてるわよー」

「はい、クイントさんありがとうございました」

テストルームから出て一人を見送る。ロビーまで行きたいといふ
だがトレーニングウーハのままだしな。

「ではな」

「じゃあね~」

二人が見えなくなつた。さすがにまだ時間はあるし、もう少しうつと身
体を動かしておこう。

次こそはクイントさんに有効打を当てるやるー！

欲しいとは言つた、だがやり過ぎだらう。」れ・・・・（後書き）

書きあがつたのはいいんですけど特にナカジマ姉妹が来た年やクイントたちがいなくなる事件の年が。

次回の更新は少し遅れるかもしません。

では次回の更新で。

決心はついた。だが・・・・・奴らとは関わりたくないな、マジで。（前書き）

息抜きにちょっと書いていたら、書きあがってしまった・・・・・まあいいか。

決心はついた。だが・・・・・奴らとは関わりたくないな、マジで。

時が過ぎるのは早く俺は十歳になつた。アレから二年間特訓し、武術の進歩もかなりあり近所にあるストライクアーツの道場で相手になる人物は数える程にしかいない、そろそろクイントさんに有効打を当てられると思っていたのだが・・・・・それは叶わなくなつた。なぜなら・・・・・。

「何で・・・死んじゃつたのよクイントちゃん!-!」

クイントさんが死んだ。それは突然やつて来た連絡で分かつたことだった。

「・・・・・・・・・・・・

棺桶の中で静かに横たわるクイントさん、肌は土氣色になつていて微動だにしない。信じられないが死んでいるのだ。

「う、うう・・・・・・

棺桶に縋り付き泣いている母さん。俺は母さんが泣いている姿を見るのは初めてかもしだれない。

「クイントさん・・・・・・・・

また、稽古してくれるんじゃなかつたのかよ。俺強くなつたと思うんだぜ。

心の中でそう語りかけるが、誰も答えてはくれない・・・・・。

「…………」

死んだのはクインントさんだけではない、彼女が所属する部隊が全滅したそうだ、つまりゼストさんもだ。

さらにメガーヌさんという母さんの友達も行方不明らしい。メガーヌさんは俺も何度も会ったことがあったので覚えている。しかも三歳の娘さんがいたはずだ。

「グスツ、グスツ……おかーさん……」

「う、うう……！」

「…………」

クインントさん、子供いたんですね。なんで話してくれなかつたんだろう……でも理由はもう聞けないか。

「クイントさん……」

俺は持っていた花をクイントさんのそばに置き。

「ちょっとひらり……」

別れを告げたのだった。

「ねえ、母さん」

「何？ヴァント」

クイントさんの葬式の帰りの車の中、俺は決意したことを持てることに告げた。

「俺、管理局に入りたい」

「…………」

何も言わない、怒っているのか呆れているのかは分からないな。

「さう…………でも何で？」

「クイントさんの姿を見てそう思つた…………」

「クイントちやんの？」

「いや、正確に言えばクイントさんの家族の姿が

クイントさんの遺体に縋り付き泣く小さな女の子と必死に涙を堪える姉と思える女の子、そして悲しそうにしているクイントさんの旦那さんのケンヤさん、その三人の姿を見ていてとても苦しくなった。

人の悲しそうな顔を嫌になつた。見たくは無いだからもうそんな人が出ないように守つていきたい。それを母さんに伝えた。

「そつの…………フフフ、やっぱ私の子供ね、ヴァントは

「え？」

「どうこいつことだ？」

「母さんも管理局にいたの知ってるわよね」

「うん、確か技術部だったよね？」

「そうよ～私にはヴァントと違つて魔法資質は無かつたからね～。やれるとしたら得意のデバイス弄りくらうだつたらね～」

「そうだつたのか。で、今はその時の経験を生かしてデバイスの会社の社長か・・・・・。

「でも、なんで管理局だったの？デバイス弄るなら民間の会社もあつたのに」

「それはね、お母さんは人助けがしたかったの」

「人助け？」

「そう、昔田の前でビルの爆発事故が起きてね爆発に巻き込まれて死んだ親の前で泣いている子供の姿を見たの」

母さんは淡々と語つていく。

「その子の周りは火に囲まれていてね誰も助けにいけなかつたのよ。私はその泣いている子供の姿を見ているだけで心が苦しくなつた。助けたいと思つたの、でも助けられない・・・・」

「その子はどうなつたの？」

「無事助けられたわよ、管理局の救助部隊にこの時なのよ私が管理局に入ろうと思つたのは。管理局に入れば誰かを助けられるあの子の流した涙を見ないで、泣かせないですむって。変な話でしょ？でもね、お母さんはたとえ力が無くても自分のできることをやることで人助けができるって信じていたから管理局に入ったの」

「…………」

「ヴァント、母さんはあなたが管理局に入りたいって言つたら止めないわ、でも…………」

母さんは俺を抱きしめた、その腕は少しだけ震えていた。

「絶対に帰つてきひね…………あなたのクイントちゃんみたいに…………いなくならないでね」

「うふ…………絶対に帰つてくれるよ、母さん」

強くなる、そして守れるようになつてみせるよ母さん。

それから一年、俺は取り合ひはず魔法学校初等部を卒業した。この一年は管理局員になるため魔法の修練、勉強などと大忙しだった。後母さんの薦めでデバイスマスターの資格を取るための勉強をした。

この資格はデバイスの整備や製造に必要な資格なのでとつておいて

損は無いと言われた。

時の流れは早いな・・・・毎日が濃密過ぎてマジでやつ感じ
る。

でもおかげで・・・・。

「本校の試験をクリアした諸君等を歓迎します」

おかげで俺は陸士訓練学校に合格したのだからな。

「管理局員武装局員としての心構えを持つて平和と市民の安全のための力となる決意をしかと持つて訓練に励んでください」

ザツ！

「はいっ！」

壇上に上がっている訓練校の校長に敬礼をする。

「以上、解散！一時間後よい訓練に入る」

「はいっ！」

これから始まるんだ。

「えーと、十七号室か・・・・つと、ここだな」

訓練校は寮制だからね相部屋は当然だ。さて、どんなやつがルームメイトなんだろうね。ちなみにルームメイトだからって訓練のパートナーというわけではないようだ。

二二二

「失礼する俺は・・・・・・・」

「うふふ……私といいじゃあないよ」

「は、放せ！俺にそんな趣味はない！」

バタンツ！

ガチヤ

• • • • •

「ヴェ、ヴェントか！た、助けてくれ！」

「あら？」 つちもいの男・・・・・

「うわあ、こっちに氣づきやがった、このオカマ。」

「おに馬鹿、何でここにいる？」

「ふ、ふふ・・それは永遠のライバルである俺がいないとお前が寂しいだろうと思つてな・・・わざわざ陸士学校に入学してやつた・・・」

「うるせえ

「つほあーーー？」

「いやん、ワイルドな人

一発殴つておいた。

「こちいち殴らないでーー結構痛いんだよーーー！」

「本気でやつてるからな

「ヒドッ！？」

「クールなのもいいわん

はあ・・・・・「イツとオカマがルームメイトなんて最悪すぎる
だろ。てか、なんで合格できてるんだよコイツ。筆記テストはかな
り難かつたはずだぞ。

「ふつ・・・・・天才の俺様に不可能は無い！問題なぞ全てこの鉛筆
サイコロでやつたのだ！」

「・・・・・・・・・・・・」

頭が痛くなってきたよマジで。

つて、時間やばいな、後十分で集合じやねえか。

「おに馬鹿にオカマ。準備しろ

「え、準備つて？」

「誰がオカマじゃい！」

「後十分で集合だぞ」

「ぬおつ！？マジかよ！」

「あら？急がないとねん」

急ぎトレーニングウェアを持ち更衣室に向かう。この三人で過ごすのかよ・・・・・・鬱だ。

更衣室で着替え終わり、ほとんどの奴らは訓練用デバイスを借りに行っている。俺は自作のグローブ型のデバイスを持ってきたので問題ない。

「ところでイケメンさん、あなたのペアは？」

杖型のデバイスを持ったオカマが戻ってきた。どうやら奴はミッド式か・・・・・。

「近づくなオカマ・・・・・それと俺はヴェント、ヴェント・カグラだ」

「あり？」「寧にどうも、ジョニー・グラメルよ。それと私はオカマじゃなくて身体が男なだけよ」

いや、それがオカマだろうが。

「……で、ペアの話だつたけがジヨニー」

「ええ、あなたペアはどうしたの？普通はルームメイトとなるのに」

そのことか…………。

「どうやら俺のペアは女子らしい」

「あらわづなの、珍しいわね」

そうだな、訓練校のペアは連携が円滑に進むために同性同士で編成されるんだがな。今回は人数の関係で俺が女子とペアになったようだ。教官からは後で教えられる」とになつてゐる。

「ああ、まあ正式なペアが決まるまでの仮ペアだ、気にほしないこと

「わ、まあ頑張りなさい」

「ああ」

さて、どんな奴なんだろうな。

「おおこ、わいつひづせヒュントー」

「騒ぐな馬鹿が」

まつたく、騒がしい奴だ。てかそのスピア型のデバイスを振り回

すな他の奴に迷惑だ。

「ムフフ、頑張りましょうねカカオちゃん」

「ち、近よんじゃねー。」

「あん、いいじやなのよ私たちペアじやない」

「ぐ、来るな—————」

「フフフ、お待ちになつてえ—————」

やっぱ騒がしいなあの一人。でもカカオの奴に同情するゼジヨーーと一緒に緒なんて想像しただけでゾッとするぜ。

「さて、俺も行くか」

とりあえずまともな奴がペアであつてくれよ。

「これより訓練を開始するーまずはラン&ソフトだ、まずはAチームからー。」

訓練が始まった、でも俺は今別の問題に直面していた、それは・・・

「始めてまして、ギンガ・ナカジマです。よろしくお願ひします」

青く長い髪の後ろにリボンのワンポイントの俺と同世代の少女、しかも性はナカジマ・・・・間違いないあの時見た、クインントさんの娘だ。

「まさかこんなところで会うなんてな・・・」

「？　どうかしましたか？」

「いや、何でも無い。俺はヴェント・カグラだ。よろしく」

「はい」

手を差し出し握手する。どうやら俺のことは覚えていないようだな・・・まあ、母親の葬式だったからな來た奴の顔なんて覚えてないか。

「ところでその『デバイスは自作ですか？』

「ん？ああ、そうだぞ」

「へえ～凄いですね！」

「あ、ああ」

ホントにクイントさんの子だな、しっかりと人の目を見て話すところなんてまんまクイントさんだ。

「どんな機能があるんですか？見たところカートリッジシステムが搭載されてい無いようですがけど・・・」

「ああ、カートリッジシステムは着けてないな、あとはちょっと頑丈に・・・」

「あ、この部分は何ですか？何かの射出部分に見えるんですけど」

し、質問が止まん・・・！それに返答が済んでいない。

「あ、こここの材質もしかして・・・？」

「次はCチーム、前へ！」

「お、俺たちの番だ、行くぞー！」

「あ、はい」

はあ・・・助かった。

「ラン&シフトだ、分かるよな？」

「はい、障害物を突破してフラッグ位置で陣形展開、ですよね」

「そうだ、そのローラーブース型のデバイスからして足は速いだろう？先行しろ、俺がフォローする」

「分かりました！」

さて、実力はいかほどに・・・。

「55・・・・セット！・・・・ゴーー！」

ドンッ！

開始の合図と共にナカジマはダッシュをかけた、用意されたコーンを安全確認しながら器用に曲がっていく。そして俺は彼女の後ろを追いかけ、そして危ういところをカバーしていく。

先にフレックポイントに到着したナカジマは警戒態勢に入り俺を待つ、そこに俺も到着し陣形を開く。

「よし55番、いいぞー！」

ふう・・・ナカジマもちゃんとできる奴みたいだな、これなら心配は無いか。

「お疲れ様です」

「ああ、お疲れさん。次は・・・」

Г 62 - - - .

なんだ?

「危険行為！コンビネーション不良！腕立て二十回だ！」

「な、何故だあ――――――！？」

「あらん？私もかしら？」

「連帯責任だ！」

・・・・見なかつたことにしよう。

「な、なんか変な人たちですね・・・・・」

「そうだな・・・ほら次行くぞ、順番だ」

「あ、
はい」

次は垂直飛越、相方を押し上げて堀の上に飛び乗らせ、引っ張つてもらう奴だ。

「今度は私が下に行きます」

「ん？ そうか、男の俺がやつた方がいいんじゃないかな？」

「私は足のがありますから」

足？ああ、そうかローラーブーツじゃ持ちにくいか。

「そう、だな……じゃあ任せる」

「はい！」

「55番」

壇の前に立ち俺はナカジマが組んだ手の上に足を乗せる。

「頼む」

「二十九日から一ヶ月で六回もお出でになつたのです。」

つて、「あつ！？」

上に投げられ壙の頂上はすぐに見えたのだが力の入れすぎだ！

(チツー)

壙を掴む事ができなかつたのでそのまま足を乗せてバランスをとりながら立つ。

「ふう・・・・・」

「は、はい」

下のナカジマに手を伸ばすとジャンプして俺の手を掴んだ、俺はそれを引っ張り上げ一緒に下に降りた。

「55番・・・・いいだろ。だが力を入れすぎだ、もっと抑えろ」

「りょ、了解しました・・・・」

まあ成功したからいいかね。ナカジマは優秀だけどまだ力加減にムラがあるな、そこは直していかなきやな。

「すみませんでした・・・・」

「気にするな、成功はしたから十分だ」

「そ、ですか・・・・」

ん~、クイントさんみたいに活発なタイプじゃないからやつこくへいな・・・・・。

「次、
62番！」

お、今度はあいつらの番か。

「こつぐせん――――――！」

ええ、突き上げて頂戴！激しく！」

「...」まつ毛

おいおい、あれば力入れすぎだろ。
しかも魔方陣出てるし……
てか、あいつベルカ式だつたのか。

キラノシ

「馬鹿が・・・・・」

ジョニーは星になつたとさ。

帰ってきたよ、しかも地面に刺さってるし。

「死んじゃつた・・・の?」

「漢女、フォ――エバー――――!」

「ヒイツ！？」

ゾンビか奴は。てか漢女ってなんだよ？

「カ力オちゃん、私を殺す気！」

「いや、そのすまん」

「いいわよん」

「いいのかよ。

「62番・・・・・貴様らは走つて来い！校舎百週――」

「げえ！？」

「いやん」

はあ・・・・・前途多難だな。

「へ、変な人たちですね・・・・・本当に」

「そうだな・・・・・」

部屋割り・・・・・変えてもうえないかな、マジで。

決心はついた。だが・・・・・・奴らとは関わりたくないな、マジで。（後書き）

少し話の展開速度が早すぎたか？でもまあいいか。

訓練校時代に突入しました、これからしばらくは訓練校編になる予定です。

オリキャラにオカマが登場しました、作者はオカマキャラが好きでするので後悔はしていません！

では次回の更新で。

パンダか・・・・何時までもつねやん。（前書き）

お久しぶりです、ITSの方が落ち着いたので、よひやへりありを上げれます。

それでは本編ぞいつい。

パンダか・・・・・向時までもつねや。

「でりやあーーー！」

「ぐうーー！」

訓練校の訓練が終了した後、俺は自主練としてギンガと組み手をしていた。

「じつー！」

「キャツー？」

ローラーブーツでつけた加速の勢いをのせた蹴りを右拳で殴りはじき返した。ギンガはそのまま倒れ・・・俺はそこそこ・・・。

ビュツー・ビシッ！

「あうつーーー？」

顔に寸止めの拳を放つてから、デコピンをした。

「また俺の勝ちだな

「うーー、アント君のそれ卑怯だよ～

ギンガは「」を押さえながら恨めしそうに俺を睨む。

「いや、卑怯じゃないしな。魔導士同士の戦いじゃシールドやプロテクションの防御は当たり前だろ？」「

「せうだけど…………殴り返すのいやつは卑怯だよー。」

はあ・・・・・我僕なお姫様だこと・・・・・。

訓練校入学から一ヶ月、俺はギンガと仮ではなく正式にペアを組むことになった。まあ、仮ペアからそのまま本ペアになるのが主流だが実際、こいつとは息を合わせやすいし気も利くので組んでよかったと思う。

それと、なんでナカジマって呼ばないのかとこいつと本ペアになつた時にギンガが。

『正式にペアになつたんだから名前で呼んで

と、言われたからだ。最初は断つたがこいつ地味に頑固だから名前で呼ぶまで何度も、しつこいくらいに何度も言つてくるので名前で呼ぶことにしたのだ。

「まじり、文句ばっか言つてないで立てるか?」

「うん、ありがとう」

ギンガの手を取つて立ち上がらせる。

「時間も遅いしそろそろ戻るか」

「うん、そうだね」

もう、すっかり日も暮れてまだ回りに何人かいたはずだが、そいつらももうなくなつて……。

「どうやあ――――――バ――ングアタ――――クツ――!」

「甘いわよん！漢女捕縛陣！」
おじめばばくじん

「何の！？」

・・・・まだいたか。しかも黒麒とジニアのハジだし。

しかし、相変わらずの黒鹿魔力たな・・・・・それも炎熱変換の
レアスキル持ちだし。ジョニーのバインドを強引に引き裂いたぞ。
ジョニーもジョニーだふざけた技名だけど、あのバインド頑丈で
一回捕まつたら中々抜け出せないんだよな。

「相変わらず凄いねあの二人」

「ああ、今年の中じゃ一・二を争う実力者だからな」

ただし馬鹿だがなと付け加える。それはギンガも苦笑いして否定はしなかつた。

あの二人も正式なペアを組んだようだ、いや、正確に言えば組まされたというべきか。魔力保有量が多く、由緒正しいベルカ騎士の一族の力力才。あんな馬鹿がベルカ騎士の末裔だなんて信じられん

の戦闘能力も優秀なジョニー。

はつきり言って今期の中じゃこの一人は最強の部類なのだ。だが・
・・・。

「個性が強すぎるんだよな、あいつ等・・・」「

ここから個性が強すぎて誰も組めないので。馬鹿すぎて誰も制御

できない一力カオ（馬鹿）、その強烈過ぎるオカマツぶりで誰も合わせられないジヨーー、はつきり言つてその才能が勿体無さ過ぎる。結果、仮ペアの時点で組まされていたのをそのまま延長して正式なペアとなつたのだ。

「ぬおりや————！」

「むつふーーーん！ー」

本当に勿体無い奴らだよな、色々と・・・・・。

「まったく、あの馬鹿魔力、少しでも分けてくれないかね・・・・・。
・

「あはは、大丈夫だよヴェント君強いから」

「そひ、言つてもな・・・・・・」

俺、ヴェント・カグラの悩み、それは魔力保有量が一般管理局員よりも少ないので。若干ではあるが一般局員は平均でBランクなのだが俺はCランク、本来なら俺のような資質の低い奴は前線に出されないので。

「大丈夫だよ、まだ成長期なんだし。それにアレ付けてるんでしょ？」

「そりだが、あまり効果は無いしな・・・・・・」

「もう、簡単に上がつたらみんな苦労はしないよ」

「それもやつだな」

ギンガが言ったアレとは今、俺が付けているリストバンドだ。これは一見ただのリストバンドに見えるが実は特殊な素材でできていて、体に魔力負荷を与える物なのだ。前に魔力が少ないと悩んでいた俺に母さんが作ってくれたのだ、筋力負荷は体に負担がかからず魔力負荷なら体に負担がかからない、負荷と開放を何度も繰り返すことで魔力量が増えるのだ。

正直言うと、これのおかげでランクになれたのだが最近じゃあまり効果も無くなつて来ている。そろそろ限界かね。

「あ、決まった」

「ん？ おお、そうだな」

話し込んでいるうちにあいつらの模擬戦が終わつたようだ、結果はジョニーの勝利で一力カオ（馬鹿）はなにやら如何わしい縛り方のバインドで拘束されている。無様だな。

「じゃあ、戻るつか」

「おひ」

さて、明日も早いことだしシャワー浴びて寝るか。ジョニーと一緒にシャワー浴びると色々と危険だからな早く行こう。

「ぐふふ、ああ、カカオちゃん。私といいことしましょうね

「だ、誰か助けてえ————！？」

俺は何も見てないし聞いていない。

「納得いかねえ…………」

「うつむこ、黙れ」

ガスツ！

「ゲフッ！？」

「『アガツル』がつたのでとつあえずボディーブローを打ち込んでおいた、わりと本氣で。

「もう、ヴェント君。暴力はダメだよ」

「むう・・・・・」

魔法学校時代からの条件反射だからな、つい殴ってしまう。

「お、おお、さすがギンガちゃん……姿もそうちだが心まで女神のようだ・・・・・・」

「『アガツル』もつむかって、もつかよつと周りの迷惑を考えなよ」

「…………チクショウ」

「あ、りん、どうしたのカカオちゃん？」

俺たちが騒いでいるジヨニーがやつてきた。

「あ、ジヨニー君」

「よつ、ジヨニー」

「ハ、アイ、ギンガちゃん。で、カカオちゃんはどうしたの？」

今じゃ普通に挨拶しているが、最初のうちは怯えていたからなギンガの奴。まあオカマなのを除けば普通にいい奴なんだよ。ジヨニーって、やっぱ色々と勿体無い奴だよ。

「それが……」

「なんで俺たちの順位があんなに低いんだよ……」

「今回の訓練成果発表が気に入らないんださ」

先ほどこれまでの成績の発表されたのだ、教官判断の正式なものではないが参考になるのだ。俺たちは総合五位、結構いい所にこれた。で、カカオたちの順位は。

「だつて最下位だぞ！納得できるか！！」

最下位だ、まあそりゃそうだよなアレだけ訓練をかき回しておきながら上にいられると思つなよ。

「そうよね、でもしょうがないわカカオちゃん、実際私たちもともに訓練できないんだから」

「そんなの知るか！俺たちが一番強いんだぞ、なのに最下位なんて納得できねえよ……」

「こいつ等が一番強いそれは本当のことだ。この前のペア同士のチーム戦でいつも全戦全勝、今回の成績順位のトップの奴らに全勝したのだ。それも圧倒的な、俺とギンガも負けた・・・・悔しいことにな。

「でも、ただ強ければいいってものじゃないわ、管理局は組織なの。規律を守れなければ意味が無いわ」

「でも実際に強い奴が上に行つてゐるじゃねえか！なのに何で・・・・」

「落ち着け馬鹿が

ドスツ！

「グフウ」「――？」

ボディーをまた一発殴つておいた。

「な、何しやがるヴァントー！」

「だから落ち着きやがれ。ジョニーに文句言つてどうする、成績を付けたのは教官だ文句があるなら言つて來い」

「ねつひー、眞ひ こめひやるだ」

立ち上がり教官の元に向かっていった一カカオ（馬鹿）、これでよし。

「い、行つちやつたね・・・・・・」

「あれでいいの、ヴァントちやん?」

「いいんだよ、俺たちが言つてもあこつは理解しねえよ。だから直接、教える立場の教官に言つてもあらつたまづがいい」

教官の眞ひとまづちやんと聞くからなあこつは。

「それに、このことが理解できないならカカオは管理局に必要は無い。どこか紛争が起きている次元世界で傭兵でもやっていればいい」

「口の力を誇示するだけなら管理局に入るなつてことだ。

「ヴァント君・・・・・・」

「ヴァントちやん、それは言つあざよ」

「確かに言つすぎだな・・・・・・だが、あいつはスタンダードプレイが過ぎている。もし同じ部隊に所属したとき俺はあいつに背中を預けられない。それはお前も同じなんじゃないかジョニー、ギンガ

「・・・・・・・・・・・・」

黙る一人。否定はしないのは心の中じゃ俺と同じ考え方なんだろ？。

「まあ、ここの話はここまでだ。これからはあいつ次第だ」

「そりよねん・・・・・力カオちゃんを信じるしかないわね」

「そりだね」

「あ、ところで、ジョン・ギンガちゃん、明後日からの休み何か予定ある？」

「ん？ 休み？」

「休みって何だ？」

「何だ、って・・・ジョン・君、明後日から訓練校のシステムチエックで二日間お休みになるんだよ、忘れたの？」

「ん？ ああ、そうか明後日から休みだったか、すっかり忘れてたな」

訓練に必死で忘れてたぜ。

「もう、ジョン・君たら・・・・で、ジョニー君どうしたのいきなり休みの予定なんて聞いてきて」

「そりだぞ、まさかストーカーするためじゃないよな・・・・」

「そりだら言わねえぞ。」

「そりじゃないわよ！ お休みの日、一緒に買い物行かない？」

「「買い物？」」

ギンガと声をそろえて言ってしまった。

「そう、実は一人にお願いがあるのよ」

「お願ひって何？」

「女性物の服を選べって言つならお断りだぞ」

ジヨニーと一緒に文物の服屋に入った日には俺も変態の烙印を押されるだろう。

「違うわよ、実はデバイスの部品を見に行つてほしいのよ」

「デバイスの部品? 何でだ」

「実は私の魔法、訓練用のデバイスじゃ処理し切れなくてオーバーロードしちゃうのよ。だから教官に自作のデバイスか市販されるものを買えって言つてね……でも市販されている奴だとどうしても高くなるから……」

「だから私たちに?」

「そうなのよ! 私、デバイスの部品のことなんて全然分からないし……だから自作デバイス持ちのあなた達に教えてほしいのよ」

ふむ、そういうことか……確かに訓練中何度かジヨニーのデバイスの調子が悪そだつたからな……原因は処理し切れ

なかつたのか。まあ訓練用だからな、ジローのよつな一点特化型の魔法じゃそうなるか。

「こつこま色々々と世話をなつてゐる……。

「いいぞ、俺でよければ教えてやるよ

「私も。でもそこまで期待しないでね」

「ホント…ありがとう」「一人とも…それじゃあ何時にする?私はいつでもいいわよん」「

「ん~と、私一回家に帰りたいしな…・・・スバルの様子も見に行かないど。それじゃあ、一田田なんてどう?・・・ヴェント君は?」

「ん、そうだな・・・・・・」

「俺も家に帰りたいしな、母さんにも会わないと・・・・それだつたら一田田がちゅうづいこか。

「俺もそれでいいだ

「じゃあ、決定ねん!よろしく頼むわよん!」

「ああ

「うん

せひ、じやあ店調べておかないとな・・・・・・つてあれよ。

「・・・・・・・・・・・・・・

「よう、どうだつた馬鹿」

「ふつ・・・・・だ、大丈夫、か、力力才君・・・」

「あらん、イケメンなのに勿体無い。でも可愛くなつたわねん・・・
じゅるり」

教官に文句を言つて帰つてきた力力才の顔は見るも無残な面目に青タンをつけた・・・・・第97管理外世界の人気動物、パンダになつていた。

「・・・・・笑いたければ笑え」

「じゃあ、大笑いしてやろうか?」

「生意氣言つてすみません!だから笑わないで!」

自業自得だ馬鹿が。ちなみにギンガは隅で必死に笑いを堪えていた。

「あつ、遊びに行くなら俺も行くぜ!」

聞いてたのかよ「イツ。どんだけの地獄耳だよ。

ちなみに翌日、パンダのまま訓練に出た—力力才（馬鹿）は全員に笑われるという大恥を搔いたのだった。

パンダか・・・・何時までもつねやひ。(後書き)

パンダ、見に行つたのですけど人並みに揉まれて全く見れませんで
した・・・チクショウ!

次回は買い物編?です。それでは次回の更新で

掲り出し物とな一期一念なのだよ、分かるかね？（前書き）

書をおがつましたので投稿します、今回は原作でもお馴染みのあの子を登場させました。

では本編ぞひづれー。

掘り出し物とは一期一会なのだよ、分かるかね？

「遅いな……時間間違えたか？」

休日の一日目、俺は事前に決めていた待ち合わせ場所の駅前で待ちぼうけしていた。

「間違つてないよな……全員遅刻か」

「あら、早いわねんヴァントちゃん」

「遅いじゃねえかジョニー、遅刻だぞ」

待ち合わせ時間から一十分でようやく一人やつてきた。

「え？ 何言つてるのよ、待ち合わせの時間変更になつたじゃないの」

「は？ そんなの知らんぞ」

聞いてもいなし。どうこうことだ？

「あら？ おかしいわね、カカオちゃんが連絡するつてことになつてたはずなんだけど……」

ああ、あいつのせいか……！

「やつほ———！ 倭様参・」……

走ってきた奴に俺は思いつきラコアットを喰らわせた。もちろん

ん手加減なしだ。

「何じゃねえよ馬鹿が、貴様、俺に時間変更の連絡はビリうじた」

忘れてやがつたなコイツ。

一、政治上場、政治事件。

ドスドス！

一目があ——！？

知るか

「後はキンがちゃんだけね」

「そうだな」

「田中さん、お見えました！」

無視だ無視、しばらくそのままでいろ。

一
あ、
来たようねん

「そうみたいだな・・・・つて、ん？」

駅のホームから見慣れたリボンの女の子が見えた、ギンガだ。だがその隣には・・・・・。

「誰かしら、あの子?」

「・・・・・・・妹じやないか」

ショートカットの小さな女の子、あれはクインントさんのもう一人の娘、葬式の時に見た泣いていたあの子だ。
でも何でいるんだ・・・・・。

「じめんなさい、遅れちゃった?」

「いや、大丈夫だ」

「ええ、時間ピッタリよ。それに女の子は準備に時間がかかるからね」

「そう、よかつた・・・・・あれ? カカオ君は何をしてるの?」

「さあな、目が退化したんじゃないか。それよりもその子は・・・・?

俺たちが田線を下に向けると、女の子はギンガの後ろに隠れてしまった。ジョニーが怖いのか?

「あ、うん私の妹で、どうしても着いてくつて・・・・ほら、スバル。挨拶しなさい」

「う、うん・・・・」

ギンガが背中を押して前に出させた。この子もクインントさんに似ているな・・・・・。

「す、スバル・ナカジマです。よろしくお願ひします・・・・・」

うん、ちゃんと挨拶もできるみたいだな。

「はい初めまして、私はジョニー・クラウンよ。ジョニーって呼んで頂戴、スバルちゃん」

ジョニーは目線をスバルちゃんに合わせるのだが元が不気味なせいかまたギンガの後ろに引っ込んでしまった。

「こ、こら、スバル！失礼でしよう」

ל'ה'ג'ג

あらら、完全に怯えちゃってるよこの子。どうするジョニー。でも、ジョニーの姓つてクラウンだったのか初めて知ったな。

「あ、アメだ！」

ジョーはポケットの中からアメ玉を取り出してスバルちゃんにあげた。アメに釣られてスバルちゃんもギンガの後ろから出てきてアメを受け取った。餌付けだなコレ。

しかしスバルちゃんもスバルちゃんだ、お菓子が好きなのかもし

れないけど怪しい奴にお菓子をもらひて心を許しかば、だめだわ。

「せー、やめしくな

「うん」

まあ、ジョニーだから大丈夫か。次は俺か・・・・・。

「初めましてスバルちゃん。俺はヴェント・カグラ、よろしくな」

ジヨーーがやつたよつに田線を合わせて手を前に差し出す。でも、スバルちゃんは・・・・・。

卷之三

「な、何かな？」

۱۷

もしかしてこの子、俺のこと覚えてるのか？

「あ、ギン姉と一緒に写つてた人だ！」

「ん？」

「ちょ、す、スバル！」

『云つてた? ビルニアーとだ?

「あらん、どうじゅ」とスバルちゃん?」

「えっとね、前、ギン姉からのメールの写真にね、一緒に貼つてたの」

「へえ～、やうなの

「写真って……ああ、確かに正式にペアを組んだ時に撮ったけな。ギンガの奴あれ送ったのかよ。でも、ジヨニーなんでお前、ヤツてるんだよ、はつきり言って気持ち悪いぞ。

「べ、別に深い意味は無いからねーた、ただの連絡の為に……」

「ふう～ん…………まあ、そういうことで元気にしてあげましゅうか」

「じょ、ジヨニー君ー。」

「？」

「何の話をしてこらんだー」「ひひひ……。

「あ、それよりも早く行きましゅうー。時間は有限なんだから

「ん? そうだな」

「やつよねん、行きましゅうか」

「ああ、じゃあまず俺のデバイスの部品を置つたショッピングに行くか。」

「じゃあ、やつしましょ。お願ひねガントちやん

「ああ」

あそこだつたらいい掘り出し物がありそうだしな。ジヨニーに会う部品も見つかるだる。

「いじりちだ」

「ええ、さあ行くわよスバル」

「うん。」

「さあ、気合入れていくわよゴルアー。」

ジヨニー、いきなり野太い声に変えるなよな・・・・・。

「ま、待つてくれ皆・・・・・田が、田が見えないんだ」

あ、馬鹿の」とすっかり忘れてた。

「むう・・・・・・」

「すまんな、あんたが言つた部品は今は扱っていないな

「そうですか」

「リリにも無いか・・・・・。

「リリも黙田みたいね・・・・・」

「ああ、もう製造してないのかしら・・・・・」

そんなこと無いはずなんだけな・・・・・・・・・・・。ジョニーのデバイスの部品を求めていろんな店に入ったのだが最後の一つがどうしても見つからない。

「まだなのかよ、もう飽き切ったぜ」

「たくつ・・・・・」

「カカオ君そんな」と言わないので、今日はジヨニー君の為に着たんだから、「

「でもよ、コレだけ店を回ったのに見つからないならもう無いんじやなねえのか?」

・・・・・その可能性もあるな・・・・型は古くマイナーなパーツだからな、市場に出回っていないのかも知れないな。

「もうよ・・・・・ねえ、ヴァントちゃん、代用できるパーツは無いの?」

「あるはあるが・・・・・高いぞ」

「どの位?」

「……………べらこだ

ジョニーの耳元で小声で囁ひ、ジョニーは固まってしまった。

「マジで……

「マジだ

代用できるバーツの値段はハツキリといえば安い。デバイスなら簡単に買える値段だ。そのくらいの高級バーツなのだ。

「それは無理ね…………

「だろ

俺たちはまだ正式な局員じゃないから給料は少ないからなるべく少ない出費でやらないといけない。

「そ、そんなに凄い値段なの？」

「新品のデバイスを買ったほうがマシって値段だ」

「うわあ…………

「後一つなんだけどな…………。

「ギン姉、お腹空いたよ～

「え？あ、もうこんな時間…………。

「そうだな、いつたん中止して飯にするか、それでいいかジロー？」

俺も腹減つてきたしちょうどいいか。

「いいわよん、私もお腹ペコペコ」

「俺もだ！」

お前には聞いていないわカカオ（馬鹿）。

「じゃあ行くか」

さて、バイキングの店を探すか。じやなきやこの姉妹は・・・。
・。

「おかわり！」

「わ、私も・・・・・・」

「「「は、ははは・・・・・」」

ど、どんだけ食つんだこの姉妹は・・・・・。訓練校でギンガとよく行動することになつてから分かつことなのだがコイツは、いやこいつの家系はとにかく食うんだ。それもおかしい位に。

「ヴェ、ヴントちゃん、会計大丈夫?」

「大丈夫だ、そのためにバイキングの店を探したんだ問題ない」

「ギンガちゃんは知つてたけど、スバルちゃんまで食つとは思わなかつたぜ」

料理を取りに行つた二人に聞こえないように小声で話す。男三人。

「でも、さすがにヤバくないかしら、店員さんの皿が怖いんだけど」

「氣にするな、それに限界まできたら店員が止めに来るだろ?」

「でも、なんであんなに食えるんだ?俺もよく食べる型だからけどそこまでは食えねえぞ・・・・・」

知るが、ナカジマ家の胃袋には虚数空間でもあるんじゃねえか。

「ただいまー!」

「ただいま。三人とももついいの?食べ足りてないんじゃないの?」

「「「氣にしなくていい(わよ)」」

「? そう」

そういう皿に高く盛られた料理を食べ始めるギンガ、見てるだけで腹いっぱいになるつーの。スバルちゃんとギンガの皿の料理はみるみるうちに減つてこき・・・・・。

「ふう、『J』馳走様！」

「私も

よつやく終わったか……後ろにいた店員も安堵の息を吐いているな。

「じゃあ、『ザート』！」

「そうねスバル、アイスがあつたから行きましょう

「え？」

まだいけるのかー？思わず声が合つちまつたじやねえか、店員も。

「わーい、アイスだーーー！」

こいつらは化け物か…………。

「俺、初めてだぞ。バイキングの店で帰つてくださいって言われたの」

「だからもひるわないでよー恥ずかしいんだから…………。

「それはこいつの台詞だ

あの後すぐに俺たちの席に店長が従業員数人を引き連れて頭を下げられた。このままじゃ店が潰れるから帰ってくれと言われてな。おかげで食つていらない俺たちも公衆面前の前で大恥を搔く羽目になった。

「そ、それは謝るけど……」

「はあ・・・・まあこれでお前はあの店のブラックリストに載ったわけだ、もう行けないな」

「へ、うそっ！？そんなあのお店の料理美味しかったからまた来ようと思つてたのに・・・・」

「諦める、あっちも商売なんだ。お前とスバルちゃんがショットちゅう来たらすぐに閉店に追い込まれるぞ」

店長自らが頭を下げたんだからな、相当凄かつたんだろう、金額的に。

「まあ、次から気をつけといて・・・・」

「はあ～これで三件目か」

「何度もやつてるのかよー」

常闇犯か」「イツは、てか学習しろよー。

「だつて食べ放題つて書いてあるから・・・・・・」

「それにしても限度つてものがあるだろ？・・・たく」

「こいつそのうち街全体の店のブラックリストに載るんじゃないのか心配になってきたぜ。」

「あら、ねえヴェントちゃん。あそこのお店ってデバイスのお店じゃないの？」

「なんだって」

大通りから外れた小道の奥のほうに小さな看板が見えた、そこにはちゃんとデバイスのショップと書かれていた。

「本当だな、こんなところにあつたなんて知らなかつたぜ」

「でも、あんなボロイところにねえんじやねえのか？」

「まあ行つてみましょいよ、もしかしたらあるかもしねいし」

「そうだな、行つてみるか」

案外掘り出し物があるかもしれないしな。騙されたと思つていてみるか。

（三分後）

「毎度あつ~」

「おやが本当にあるとは思わなかつた」

「私も・・・・・・」

「あるといひはあるのね」

「しかもまだ大量にあつたぞ・・・・・・」

「こつぱーー」

「コレまで行つた店はなんだつたんだ・・・・・しかもあの店かなり安かつたぞ。今まで買つてきたパーティもあつたし。隠れた名店つてこうこうといるのなんだうな。

「でも、これで全部揃つたな」

「よかつたわねジヨーー君」

「ええ、コレで私専用の『テバイス』が作れるわん！」

「時間も余つたな、どうする？..」

「俺はこのまま解散でもここがここいつらは必ずつむすべ・・・・・。

「じゃあ、このまま遊びに行きましょー！」

「賛成だー！」

「あたせーー！」

遊びにか・・・まあそれもいいか。

「ギンガは?」

「私も賛成、洋服とかも見たいし」

「そつか、じゃあ、どこから行く・・・つー?」

景色が変わった・・・・色は灰色になり、賑わっていた大通りも人数が一気に減った・・・・これはまさか・・・。

「I、これって広域結界!?」

「な、なんでこんなものが突然・・・?」

「どうなってるんだよ・・・・」

突然の結界に戸惑う俺たち、こんな街中で結界が展開されるなんて異常なことだぞ、あつたとしても事前に管理局が退避させる。だとしたら考えられる」とは・・・・・!

「お前等、Iの先にあるデバイスショップに急ぐぞ・・・・・」

「え?何で・・・・・」

「俺の予想が正しければこれからやばいことが起きるってことだ・・・・・」

・・・・・
管理局がやらなかつたら誰がやつた?他に考えられることは・・・

「事件が起きたぞ……！」

ドホー——ンツ——!!

遠くで爆発が起きた。そこからは茶色の光、魔力光が見える。火が上がる建物、人の呻き声も聞こえてくる。

これで確實た……この絆界は犯罪者が起こしたものだ

立ち上がる火を搔き分け出てきた中年の男、目の焦点は合ってなく口からは涎が垂れている。男はその目をこちらに向けて叫んだのだった。

そして俺たちの休日は地獄へと変貌したのだつた。

掘り出し物とは一期一會なのだよ、分かるかね？（後書き）

急展開にしそぎたかなと少し後悔中。

今回の話ではS+Sのもう一人の主人公？のスバルを登場させました、これで原作突入時に話が書きやすくなる、ゲフシングフン、なんでもないです。

次回はこの小説初となるちゃんとしたバトルシーンとなります。ちゃんと書けるか心配ですが、頑張ります！

では次回の更新で

男にならなければならないことがあるのだよ。（前書き）

今回も やはり やはりです・・・すみません。
本編をどうぞ。

男にはやらなければいけないときがあるのだよ。

「ヒヤハハハー、皆殺しだ――――――――――！」

男はまた魔方陣を展開して今度はビルに向けて砲撃を放った、するとビルは簡単に破壊され崩れ落ちたのだった。

そ、それが通じないので、通信が妨害されていて……」

通信妨害も兼ねてるのかよこの結界は！

「とりあえず市民の安全の確保だ！」ジョニー、カカオ手伝え！」

「え、ええ・・・・!」

「お、おー。」

「ヴェント君、私は」

「お前は避難誘導だ！近くに避難用のシェルターがあるはずだそこに行け。それとスバルちゃんをしつかりと守つておけ」

「ル・ル・ル」

「……はまだあいつからの死角だ今のうちに市民を避難させないと…
・・・！幸いあの犯罪者は正気を保つていないので何も無いところ
に向かつて叫び続けているし見えていない。早く避難させないと。

「た、助けっ・・・・!？」

「落ち着いてください、自分たちは管理局の者です」

「か、管理局の・・・・・」

「今から安全な場所まで誘導します、だから落ち着いて行動してください」

「あ、ああ」

「よしひ、いつたんは落ち着いたか・・・・。

「では、あの女の子に着いていくください、安全な場所まで誘導してくれます」

「わ、分かった」

男性は立ち上がりおぼつかない足取りでギンガの方へと向かつていった。ジョニーとカカオも順調だな・・・・あいつがこちりに気づかないうちに何とかしないと・・・・。

「あの子が避難用シェルターに案内してくれます」

「は、はい」

座り込んでしまった女性を立ち上がらせギンガの方に向かつのを

見送る。これで、最後か……。人数が少なくてよかつた。で、あいつは……。

「ゲヒヤヒヤヒヤ！」

ドォンッ！

つー？・・・・・見つかっちゃったか。

「みい〜つけた！」

くっ！？

「ヴェント君ー！」

「ギンガは早く行け！市民の安全が一番だー！」

「で、でも・・・・・

早く行け！

「つー・・・・・分かった、氣をつけてねー！」

「おう

・・・・・行つたか。

「ぐひや、ぐひやひやはははー！」

「コイツ、薬物でも服用してるとか、精神状態が異様に不安定だ・・・。

「ひやはあつ~~~~~！..」

ドオーンッ！

「アヒヤヒヤツ！粉微塵だあ～・・・あつ？」

「危なかつた・・・・」

あの男が撃つた砲撃を何とか避けて瓦礫の影に隠れた俺たち、奴は俺の死体が見たら無いのに気づいて辺りを探している。

「で、カツコつけたのはいいけど、どうするの、ヴォントちゃん、私たちも避難する？」

「無理だうな。今避難したらこいつは避難所に行く可能性が高い・
・・・・」

先ほどのビルを破壊した砲撃からして避難所のショルターなんて簡単に潰てしまつはずだ。

「だ、だつたらどうすんだよ・・・・？」

この結界に気づいて近くの部隊がもう動いているはずだ、だからそれまで・・・・。

「俺たちが奴を食い止める

「む、無茶よ！あなたもさつきの砲撃を見たでしょー！」

「そ、そりゃあればどうみてもAランク以上だ！そんなの俺たちが食い止めるなんて無理だ！」

確かに、あの砲撃はAランク以上の威力だったが。

「だがここで下がれば市民に危険が及ぶ」

「で、でも……」

「それにすぐに近くの部隊から武装隊が来るはずだ、俺たちはそれまでにあいつの注意を引き付ければいいだけだ」

局の部隊が来ればあの男を倒せることができるはずだ。

「簡単に言つてくれるわね……」

「ああ、そうだな……でも今できるのは俺たちだけだ」

「……」「……」

「別にお前たちは避難してもいいぞ、だが俺はやる

このままあいつを野放しにしたら被害が出る、そしたら悲しむ人が多く出るだろう、俺は悲しむ人たちを出さないために管理局に入つたんだ、だからこんなところで逃げてたまるか！」

「しょうがないわね……付き合つてあげるわ

「俺も付き合つばっかりは最強の俺様がいたほうがいいだろ」

「ジョニー、カカオ…………いいんだな」

「いつも覚悟したか…………だがもう一度聞いておく。コレは死ぬかもしないからな。

「ええ（ああ）」「

「サンキュー…………」

「じゃあまずは、後ろのほうにデバイスショップからデバイスを取つて来い…………デバイスが無ければ戦えないだろうつらがいたら大丈夫だ。」

「じゃあまずは、後ろのほうにデバイスショップからデバイスを取つて来い…………デバイスが無ければ戦えないだろう

「そうね…………でも取つてこれる暇なんて…………」

「俺が奴の気を引いてる間に取りに行つて来る。だから…………」

「な、何言つてるの！？危ないわよー」「俺のはここにある

「そうだぞー！それにお前だつてデバイスねえじゃーん…………」

懐から金属製のカードを取り出し見せる。

「それって・・・・・」

「持ち運びが面倒だったんでな、携帯でやればいいとしたんだよ。まさかこんなところで役立つとはな」

「でもお前一人でなんて・・・・・」

「コレしか手が無いんだ、やるしかないと。それにお前等が早く戻つてくれればいいことだ」

「ビームだあ――――――――――

ドンッ！ ドンッ！

「時間も無い、行くぞ」

「分かつたわ・・・・行くわよカカオちゃん」

「ああー、ゴント俺たちが来るまでくたばんじやねえぞ」

۱۰۷

田を閉じて深呼吸をし気持ちを落ち着ける。・・・・・よし

L' Set

カードが光り俺の手を包み込んだ。光が納まるごとに俺のデバイスが両腕に装備した状態になつた。

「そこかあ～～～～～！」

光に気づいた奴は、魔力を収束し始めた。

「いけえつ！！」

俺の合図とともに二人は瓦礫から出て駆け出した！

「死ねえ――――！」

奴のデバイスは一人へと向けられた。させねえよ――！

『Assault Step（アサルト・ステップ）』

デバイスから電子音声が響くと俺の足が魔力によつて強化させた。そして地面を蹴り奴に突つ込んだ――！

「ひゃ？」

「喰らいやがれ――！」

『Hard Beat（ハード・ビート）』

魔法で拳を強化して俺は奴の顔を思いつきり殴つた。急接近した俺に気づかなかつた奴は俺の拳をモロに受けて吹き飛んだ。収束し

ていた魔力は霧散し砲撃の心配は無くなつた。

これで倒したとは思えない・・・・・警戒は解いてはいけない。

「貴様あ――――――――――――――

やつぱりか・・・・・。

「殺すコロス！ころす殺すコロス！――！」

奴は怒り狂いデバイスを振り回す、周りには茶色の魔力スフィアが形成されていく数は約三十・・・・威力は未知数だ。どうする！

「ア――――――――――！」

奴の奇声が合図となり三十発のスフィアが一斉に放たれた。

「くつ――？」

防ぐのは無理だ、だったら・・・・・

『Sheel Gauntlets（シェル・ガントレット）』

「はあ――――――――――」

弾くのみ――

俺の前腕は魔力を纏い、その腕で迫り来るスフィアを弾き飛ばした。

「あ？」

「おお————！」

スフィアを殴り、時には雑いで攻撃を弾き飛ばす。だが・・・・・。

「死ねシネしね死ね死ね死ね死ね死ねえ！！」

奴はドンドンとスフィアを生成して撃ち放つてくる数も多くなつていいく。それが段々と捌ききれなくなり遂に・・・・・。

「ぐつ！？」

防ぎきれなくなつて一発体に当たつてしまつた、体に痛みが走るがそのまま防ぐ。体に裂傷は無い・・・・幸い、奴のデバイスは非殺傷設定みたいだな。

「ヒヤハハハハハハハハハツ————！」

まだあれだけのスフィアを出せるのか、魔力量どんだけあるんだよ・・・。でもこのままじゃ いづれは防ぎきれなくなつてやられる・・・・ジョニーとカカオはまだなのか！

「ヒヤハツ！死ね！！」

や、ヤバッ！？砲撃が・・・・・！

「ヌオリヤア————！ストラグル・バインド！————！」

野太い声とともに奴がバインドで縛られた、そして・・・・・。

「どうせいい……」

炎を纏わせた大剣が奴を吹き飛ばした。ようやく来たか……。

「遅いぞ二人とも…………てっきり逃げたのかと思つたぞ」

「へつ、俺様がそんなことするわけ無いだろう！」

「笑えない冗談ね、ヴェントちゃん。私のことそんな女だと思つたの？心外だわん」

俺の前に立つジョニーとカカオ、二人の手にはデバイスショップから押借りてきただろうデバイスが握られていた。
ジョニーには大きな杖方のストレージデバイス、カカオは両刃の大剣型のアームードデバイスが握られている。

「随分といいのを借りてきたな」

「ええ、一番高そつのを借りてきたわ。作るならこんなのがいいわねん」

「へ、あそここのショップの奥に隠してあつたのを借りてきたぜ、これはまさに俺様のためにあるよつたデバイスだぜ！」

確かに一人の戦闘スタイルに合つてるかもな。でもこれでだいぶ楽になる。

「それよりもやつたのか？」

「さあ、でもいいのが入ったから、もしかしたら・・・っ！散開！」

ジョニーの怒号に反応しその場から飛び退くと茶色の閃光が通り過ぎた・・・やつぱりまだダメか。

今度こそマジでキレたつぽいな・・・。

一
氣、引を繰ゆるよ

わかつてゐるわ

- 10 -

武裝隊が来るまでなんとか持ちこたえな！

一
行
く
そ
ニ
！
！

ੴ ਸਤਿਗੁਰ

ドオーンッー！

「アーティスト・ジニア | 」

「おひのーちゃんバインディー！」

「ガアア！！」

ジョニーのバインドで押さえていた間に次の手だ！！

一
力
力
才
！
！

「おはようございます！」

一九三〇年六月

キーンンッ！！

「どうせ――――――」

「うわわわわわわわわ……」

「ハサヒー？」

攻撃はシールドを破れず弾かれ、奴はバインドを引きちぎり力才をデバイスで殴り飛ばした。

「せいつ！」

殴り飛ばされた力力才と入れ替わり俺が奴に殴りかかるがまたも
シールドに攻撃を弾かれ後退した。

「ハアハア・・・・・バインドが全然効かないわね」

「それよりも攻撃が全然通らない・・・・・

「堅すぎるぜ」アイツ・・・・・！』

先ほどから三人での連携で戦っているのだが奴に攻撃が全く通らない。前に当てたのは完全な不意打ちだったから通ったが警戒されて防御が厳重になりやがった。

俺たちの中で最も攻撃力がある力カオの一撃でさえ防がれる始末だ。

「ゼエゼエ・・・・武装隊は、まだなのかよ！」

「時間・・・・どれだけ経つたの・・・・？」

「ハアハア・・・・二十分だそろそろ来てもいい頃なんだがな」

結界がかなり頑丈なのか？それとも武装隊がまだ動いてない・・・・とは考えたくは無いが、このままじゃ俺たちの体力もヤバイ。

「ゲヒヒ、ゲヒヤハハハ・・・・・・！」

だがそれは奴もだ、あれだけ魔力を使つたんだどんなに魔力がかろうともそろそろ尽きててもいいはずはずなんだが。

「ヒヤハアッ！・！」

「つー？散開！」

ドンッ！

なんで一向に答える気配が無いんだよ！

「ジワ一ー！ もう一回だー！」

「オラアッ！！」

「アアアアアアアア――――――――――――！」

ジョニーのバインドで何度も縛られ奴は怒り狂う。

「カカオツ！！」

ଶ୍ରୀମଦ୍ - ୧

今度は同時だ、喰らいやがれつ！！

Hard Beat

「でえつやあッ!!」

ガンツ！－ギインツ！－

やつぱり堅いな・・・・でもこのまま押し切る！

「もう一発っ！！」

『Hard Beats!!』

左の拳にも魔力を込めて両腕で何度も殴るとシールドにヒビが入った。これを逃がすわけにはいかない！渾身の力を右手に込めて振り切った。

「おりあつー！」

「グベエ！？」

シールドは破れ、俺の拳は奴の顔へと吸い込まれた。

「どつ・・・せいつ！…」

「ガア—————？」

ドオーンッ！

さらに追撃として力カオの一閃が奴の腹を捕らえ吹き飛ばした。そして瓦礫が落ちてきて奴は埋もれた、立ち上がる様子も無く静寂だけが過ぎていく・・・・・。

「ハアハア・・・・・・」

「ゼヒゼヒ・・・・・・」

もう限界だ、先ほどの攻撃で魔力と体力を殆ど使い果たした。これ以上は無理だ・・・・。

「・・・・・や、やったの？」

「わからん・・・・だが、今のは決まつた、はずだ・・・・」

「俺様の全力だ・・・立てるわけがアーニング

マジかよ・・・・まだ立てんのかよあこひば・・・・・・。

「ゲフツ・・ガフツ・・・・！」

と、吐血・・・・・! どうか身体を壊したのか。

「これ以上は止めろ！死ぬぞ！！」

ドーンッ！！

「△！」？

聞く耳なしかよ！奴は問答無用に砲撃とスフィアを放つた。

「グルアアアアアー！！！」

奴は雄たけびを上げた後、無差別に砲撃を放ち始めた。避けた際にスフィアが顔を掠つた場所から血が流れる。あいつ、遂に非殺傷設定を切りやがった！

「完全に正氣を無くしたようね」

「でも奴は手負いだ！俺が決めてやる！！！」

デバイスを構え直した力力オが奴へと走り出してしまった。

「力力オ、一人で突つ走るな！！」

「力力オちゃんダメよ！」

「おおおおおお…！」

力力オは俺たちの言葉も聞かず突つ込んでいく。すると俺の視界に小さな魔方陣が見えた、あれは・・・まさか！？

「やめる力力オ！罷だ」

「なつ！？」

力力オの足をバインドが縛り動きが止まってしまった。設置型のバインド、あいつそんなことできるほどの理性があったのかよ！？

「ゲヒツ！」

「収束砲、ヤバイ！

「逃げる力力オ！」

「だ、ダメだ、バインドが解けねえ！…」

くそつ、力力オの処理能力じゃ間に合わない、だったら奴を…・・・！

「ジョーーー！」

「邪魔するなああああ！！」

「ぐつ！？」

「きやあん！？」

ダメだ、弾幕が濃くて奴に近づけない。殺傷設定での威力の砲撃を受けたらカカオが・・・・！

「ヒヤハツ！ヒヤハハハハハ！」

「させらかあゴルア！..」

「じょ、ジョーーーー？」

ジョーはカカオの前に立ちバリアを何重にも張る。まさか防ぐつもりか！？

「止めるジョーーーー！」

「死ね死ねシネ死ねええええええええええええーーーー！」

放たれた砲撃、その太い閃光はジョーの張ったシールドとぶつかるが・・・。

バリンッ！

その威力に耐えられず直ぐにバリアは破られる、一枚から一枚、三枚と徐々に残りの枚数は少なくっていく、そして最後の一枚が・・・。

バリンッ！！

破られた。そして閃光が一人を飲み込んだのだった。

男にならなければいけないときがあるのだよ。（後書き）

書いていていつも思うことは文才が欲しい・・・・です。

今回初戦闘シーンなのですが全然上手くないですよね、すみません。

次回の更新は少し遅くなると思います。では

無茶と無謀は違ひのを理解したよ、君の娘で……。（前略）

だいぶ難産でした……。じつ書けばここのか悩み、何度も書き直しました……。

とつあんず本編をじつが。

無茶と無謀は違つてのを理解したよ、」の身で……。

「ヒヤハハハハハハ！！死んだ！一人死んだ、ヒヤハハハハハハ！」

閃光が過ぎ去った後の場には何も残つておらず、焼け跡だけとなつていた。あの一人の姿もない・・・・。

「あ、貴様――――――！」

何笑つてやがるんだクソ野郎が！！

俺は残り少ない魔力を拳に込め、やつに殴り掛かつたが。ギインッ！

「くつ・・・・・・！」

奴の頑強なシールドに阻まれ攻撃は通らなかつた・・・・だが奴も。

「ゲホオ・・・・・・ギャハ、ハツ・・・・カフッ！」

口から血を吐き出しながらも笑つてゐる。でもそんなことは頭の中に入らない、俺の思考は奴への怒りでいっぱいだった。

「おおおおお――――――！」

『ヴエ、ヴント・・・・・・・・・・・・』

つー？今の念話まさか、カカオか！

『カカオ生きているのか!』

『あ、ああ・・・・・ジョニーも生きてる。今そこから離れたビルの裏だ』

よかつた・・・・・本当によかつた・・・・・・・・・。でもどうせつけてあの砲撃を・・・・・。

『ジョニーが砲撃を防いでくれてこのうちに向とかバインドが解けたんだ、その間に・・・・・』

そうか、だから無事だったのか・・・・・。

『とりあえずよかつた・・・・・怪我は、身体は無事なのか』

『俺は大丈夫だけど、ジョニーがちょっとヤバイな・・・・・打ち所しだいではしてんだ・・・・・意識もない』

つー早く医者に見せないとヤバイな・・・・・打ち所しだいでは死んでしまうかもしれない・・・・・。

『・・・・・・・カカオ、お前はジョニーを連れてシェルターに行け。幸い奴はまだお前たちが生きていることに気づいていない。今なら行けるはずだ』

ジョニーはとりあえず安静にしなければいけない・・・・・応急処置もだ、でもこんな不衛生で危険なでは場所では無理だ、シェルタに行かせるしかない。

『で、でも……お前一人でどうあらうもつなんだよ…』

『やるしかないだろ、それにお前、怪我隠してるだろ』

『ぐ……』

セツぱりか、なんか痛みを耐えてる感じがしたから呟いてみたんだが本当だつたな。

『で、でもお前だつて魔力が……』

『ああ、だが満足に動けるのは俺だけだ、何回避に専念すれば時間は稼げる。だから早く行け』

奴の攻撃は単調になつてゐる、できなことはない。

『…………わかつた、死ぬなよヴェント』

『ああ』

…………そして、とりあえずあいつらがシェルターに着くまでバレねえよつこしなくちや。そのままだと流れ弾に当たりそうだし。

『ゲヒッ……』

「さあ、いひちだクソ野郎殺せるもんないやつてみなー！」

「ガアアアアアアアアーー！」

よし、かかった。しかしこうなるとただの獣だな。まあ、こいつはその方がやりやすいんだがな。

「ああ、鬼こいつだ……ついて来いよー。」

『 side ?? ??』

『航空魔導師、本局01現在位置を教えてください』

「こいつら本局01、目的地まであと約十分の距離です」

『急いでください、現在地上部隊が結界の破壊を試みていますがで
れぞれにもあります』

「了解！……急ぐよ」

『 Yes , sir 』

『急がないと……』

『 side vent 』

「ハアハア……ツ！」

すぐ近くの瓦礫にスフィアが直撃し粉々になる。だが足を止める

止めた瞬間死ぬぞ！ そう自分に言い聞かせて身体を強引に動かす。

（やがんとひこであてるな……いこぞ、そのままでいて来
い。）

「ガアアアアアアツ！－！」

「ねえルーニー」

あぶねえ・・・・・コイツ段々と攻撃の精度が上がってきてやがる、いや・・・俺が遅くなってるのか。

あいつは大丈夫なのか……そろそろシリターは着いていいはずなんだが・・・。

『ヴィント、生きているか!』

きたか
・
・
・。

『ああ、生きてるわ』

よかつた
無事か

『そこまで大丈夫でもないがな』

うわ、あぶねつ！俺はマルチタスクを駆使しながら回避と念話の両方を同時にやる。

『で、ジローの容態はどうだ?』

頭部を打つたんだ、何も無ければいいんだが……。

『あ、ああ避難所に医者がいたから診てもらつたけど、命に別状はないみたいだ』

そうか、よかつた……。

『お前はどうなんだ……。』

『……すまねえ、脚がやられた』

脚をか・・・・それなつてしまつてはもう戦闘は無理だろつた。

『氣にするな、後は俺一人でやる』

『・・・・死んだら許さねえからな』

『おひ、じゃあ切るぞ』

念話を切り、思考を奴にだけに集中させる。・・・・・・・・

れい。

「これで周りに誰もいなくなつたし俺を見ている者は奴だけになつたか・・・・・・」

俺はあいつらに嘘をついていた。俺は俺達の実力じや倒せない、武装隊が来るまで持ちこたえればいいと言つたが、実は倒す方法はあつたのだ。それは諸事情で隠していた力を使えば可能なのだ。

「これだけは使いたくなかったんだけどな・・・仕方ないか」

この能力は制御が難しく危険過ぎるに使いたくは無いのだがこのままでは俺も、避難している市民も死ぬ運命にあつてしまふかもしない、だから使う。

「おい、お前！」

「ヤバ?」

「死にたくないからな」「死にたくないからな」

奴の防御力だつたら全力で殴つても死ぬことは無いだろう、だから全力でいく！

「フウ・・・・・」

構えを取り残つた全ての魔力を練り、深く呼吸する・・・・。

（残った魔力からして使える時間は約五秒・・・・短いが一発あれば十分だ・・・・・いくぞ！！）

練つた魔力を開放する。すると俺の身体を青い光が包み込んだ。

「・・・・・・・・・・」

そう呟いた瞬間、奴の視界から俺の姿は消えた。

「？」

奴が瞬きをし終え、目をあけた瞬間には俺の姿は目の前にいたのだつた。

「オラア！！」

持てる全ての力を使って俺は右ストレートを放った。

ガハアッ！？

俺の拳は頑強なシールドを紙を破るかのように突き破り、奴の腹に吸い込まれる。そしてそのまま腕を振り切った。

「オオオオオオオオオオオツ！――！」

振り切った腕は奴を吹き飛ばし、約三十メートル程先のビルに激突しようやく止まつた。そして力なく手から「デバイスも落とし地に伏せたのであつた。

「か、勝つた・・・・・・」

そう確信すると身体を覆っていた青い魔力は消えた。

「うおつと、さ、さすがにこれを使つた後じや動けないか・・・・・

L

俺が使つた能力とは一定時間の間身体能力が百倍になるというも のだ。

この力を知つたのは五才の時だ、この時期に俺は武術を習い始め一人で自主練しているときに、先程同じ青い光が俺を覆つたのだ。どうすればいいのか分からず母さんに電話をしようと携帯を掴んだ瞬間携帯は粉々に砕けたのだ、この時何が起きたのかよく分からなかつた。軽く握つたつもりだったのに粉々に砕けたのだ。

この時はまだ制御の仕方もわからずどうすればいいのか戸惑つたが一つだけ分かつたことがあつた、それはこの力は危険な物だということだ。それから直ぐに力は消えて俺は気絶したのだつた。

どうやらこの力は魔力を消費して発動するみたいで当時五歳の俺の魔力量なんて微々たるものだつたからすぐに切れたのだ。

それからこの力をすぐに母さんに相談した、母さんが言うにはこれはレアスキルという奴らしいが、この力の出所はすぐに想像できた、あのキャラ男のダーツだ。アイツは転生する際に能力をやるとか言つてたからな、これがおそらくそうなのだろう。

「たくつ・・・・・使いづらいのをくれやがつて、次会つたとき殴つてやる・・・・・」

この力を知つた母さんは誰にも言わないようにしろ言つた。どうしてかと訊いたら教えてくれなかつたが何かややこしい事があるのだろう。まあ多分だが母さんはレアスキル持ちだと管理局に知られたら半場強引に局に入れられることを危惧したのだろうな。

まあ、そのこともあつてずっと隠してきたのだ、一応ONとOFFの使い分けができるようになつてゐるから暴走をすることだけは無いのだが。

「ハア・・・・・でも、これで終わつたんだ。後は結界が解除され

るのを待つて・・・・・

あ、そういうば助けに来た局員にどう説明すればいいんだ・・・・・
俺が倒したといつたら能力のことがバレてしまうかもしないし・・・
・・・・。

と、あれやこれやと考えていた瞬間・・・・・。
ドンッ

「ガハツ！？」

俺は突如來た衝撃で大きく吹き飛ばされたのだつた。

「グウ・・・・・・ま、まさか、まだ立てるのかよ・・・・・！」

先程まで倒れていた奴は立ち上がりテバイスを構えていた、目は
大きく見開き血走っている・・・・・これはヤバイな。

「グルアアアアアアアア！！」

「ガアツ！？」

奴の放つたスフィアが左腕に当たり爆発した。腕に激痛が奔る、
そして腕は血塗れになり動かせなくなつた。

「うう・・・・・！」

クソツ・・・・・奴はバケモンかよ。

「ガアアアアアツ！－！」

「ガハツ！？」

何度もスフィアが俺に当たり爆発する、その度に激痛が奔り、俺の身体はボロボロになっていく。何度も気絶しそうになるが、痛みで起こされる。

「ヒヤハハハハツ！！」

くそ・・・・コイツ俺を轟つて楽しんでやがる・・・・。
だんだんと意識が遠のいていく、血を流しそぎたか・・・・。

「ヒヤハハツ」

「ゴリツ！」

頭に何か押し付けられた・・・・足か。踏みつけんじゃねえよ。
それに眩しいんだよ、何だよそれ、目が霞んでよく見えねえんだよ。

「ヒヤハ、ヒヤハハハハハハ！」

この光、魔力光か、つうこととは俺、死ぬのか？」「こじで・・・・
はは、二度目の人生も短かつたな、十二年か・・・・ゴメン母さ
ん、帰るって約束果たせそうにないや。

「死ねえ――――――！」

そういうや、あいつらとの約束も破ることになつまつが・・・・。
・わりい、先逝くわ。
死を覚悟し目を閉じた、そのとき。

バリイーーーン！！

「あ？ ガアツ！」

結界が破れた。頭を踏みつけていた足はなくなり、その代わりに誰かに抱きかかえられた。何があつたんだ・・・・・・?俺はゆっくりと地に寝かせられる。霞む視界の中に金髪の少女を見えた。そして彼女は。

「時空管理局本局執務官フェイト・T・ハラオウンです。あなたを逮捕します！」

そう言った、そして俺の意識は途切れたのだった。

side fates

「あれか！」

全速力で飛んで市街地の真ん中にドーム状の空間が見えてきた。
あれが結界か、こんな大規模なものを街の中で発動するなんて・・・
・・とりあえず今は市民の確保を優先にする！

「いくよ！バルディッシュユー！」

Yes · sir · Zambeर Form

「撃ち抜け雷神！ ハアアアアアア！」

結界を破壊して一気に突入する！

Jet
zam
ber

ザンバーフォームのバルディッシュで結界切り裂いた。結界は破れ私の視界に入ってきた光景は犯人と思わしき人物が血塗れの少年を踏みつけながらデバイスを向けていた。先端には魔力が収束されていてすぐにでも撃ち出されようとしていた。

「バルディッシュ！」

Sonic Moves

一気に加速して男性をザンバーの腹で殴り飛した。そして血塗れた少年を保護する。・・・・・酷い怪我・・・早く衛生兵を呼ばないと。

念話で救護班を呼び、軽い回復魔法をかけて止血だけしておく、これで救護班が来るまでは大丈夫だろう、私は少年をゆっくりと地面に寝かせる。そして・・・・・。

「時空管理局本局執務官フェイト・T・ハラオウンです。あなたを逮捕します！」

そう言い、こんな酷いことをした犯人に言い放つたのだつた。

「いくよ、バルディッシュ！」

Yes, sir.

許さない、絶対に捕まえる！そう心に誓い私は駆け出したのだった。

無茶と無謀は違ひのを理解したよ、君の身で……。（後書き）

はい、またもや出してしまいました原作キャラ、しかも主役級の方を・・・で、でも執務官だから何かの事件で地上にいてもおかしくないかなと思いまして彼女、フュイトさんにしました。

でもこれまで投稿した話を見直してみると話のテンポ早すぎですかね？ちょっと急ぎすぎたかな・・・改定したほうがいいのか少し悩んでします。どうすればいいんでしょうかね？

まあ、そのことも考えながら次の話も書いていきますので次回の更新で会いましょう、では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9643w/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS ~転生したら魔法?がある世界だった~

2011年10月8日15時09分発行